

## 特別賞

(NHK熊本放送局賞)

### 松葉杖で暮らして

熊本市立北部中学校 一年 林田 凌汰

小学四年生の冬。ぼくは、サッカーの試合で転んでしまい、大けがをした。骨折していたのだ。痛みがひどく、絶対動かしはいけないということまで右の足首にはギブスがまかれた。脚を自由に動かすことができないので、ひとりで歩くこともままならず松葉杖を使うことになった。

この日から一ヶ月半。ぼくは松葉杖なしでは、歩くことができなくなってしまった。この時、ぼくは「障がい者」になってしまったように感じた。

松葉杖をつけて学校に行くようになると、たくさんの方に気がついた。

まず一つ目は、自分ひとりではほとんどの行動ができないということ。移動教室の時には、手がふさがっているせいで誰かに教科書を持ってもらわなければならない。当然、登下校時も、荷物がもてないので車で送り迎えをしてもらわなければならない。階段を上るのも下りるのもひとりでは

できないし、椅子から立ち上がるのもひとりでは立てなかった。床にも座れないのでいつも誰かに椅子を用意してもらわなければならぬ。

ほかにも掃除ができない。給食当番ができない。みんなが普通にできていることが、何ひとつぼくにはできない。ひとつひとつ挙げればきりがないほど、たくさんできないことがあった。

今まで何も考えずにできていたようなことでも、誰かに助けてもらわなければできなくなってしまうことの多さに、情けなく、不安でいっぱいだった。そんなぼくを友達は優しく助けてくれた。でも逆に、優しく助けてくれる友達に申し訳なくて、学校に行くこと自体がとてつもなく重大な迷わくたのではないかと思ってしまう、辛かった。

二つ目は、周りからの視線。何かめずらしいものでも見るようにじろじろ見てくる。そんなに大したことじゃないのに、ただ松葉杖をつい



ているだけなのに、何か自分だけが特別、変であるかのように感じた。

そしてそれらの経験や思いの中から、ぼくの心の中に「障がい者」の人達のことを浮かんだ。

耳の聞こえない人はどんな生活をしているのだろう。車椅子の人は松葉杖とは比べものにならないくらい段差も不便なんだろうな。目の見えない生活なんて、今のぼくの何倍、何十倍大変なんだろうな。

そして視線。車椅子。白い杖。たくさんの人にじろじろ見られるあの嫌な気持ち、ぼくの中でじわっと広がった。

自分の体の一部が不自由になった時に、「障がい者」の人達の苦労や、苦しい気持ちに初めて思いが向いた。

何気ない少しの段差でも、車椅子や目の見えない人にとっては本当に不便だろう。周りの人達にじろじろ見られることがどんなに辛く、嫌で、何も悪くないのに恥ずかしいような気持ちに感じってしまうかもしれない。

しかし、それと同時にぼくは人の心の温かさにも思いが至った。

転びそうになった時、助けてくれたり、荷物が持てない時には、代わりに持ってくれた。階段を下りる時には、ぼくに手を貸してゆっくり下りてくれた。

その人にとってはささいな手助けでも、ぼくにとってはすごくありがたく、嬉しいことだった。少しの優しさがこんなにも誰かを助けられるのだと改めてわかった。

六年生になった時には、人権について学び、「バリアフリー」の考え方を知った。

建物の壁や段差だけでなく、人の心の壁も取り除いていくことは、これからの未来にとって本当に必要だと思う。「差別」されているように感じる生活は、誰にだって辛い。同じ人間なのだから助け合い、支え合うことは誰にでもできるはずだ。

けがをしたことで多くの心は以前よりも少し大人になった。多くのことに気づかされ、考えることができたおかげで、大切なものが見えてきた。

障がい者の人達に対して差別や偏見を持たない、当たり前前することを当たり前前に行う人間にならなければいけない。そしてそういう未来を、ぼくたちが創っていかねばならないのだ。それが真の「バリアフリー」なのだから。